

第4回「民具整理から見えてくる奥会津の暮らし」(11/14 開催) モニター参加者レポート

第4回「民具整理から見えてくる奥会津の暮らし」に参加して

林あゆ美

8月から毎月1回「奥会津の周り方」で奥会津に通っていると、通り道にすっかり馴染みができます。オープンディスカッションの前に、温泉に入ったり、新蕎麦をたぐったり、回を重ねる毎に、ますます奥会津が好きになります。

4回目の開催地は昭和村の喰丸小。少し早めに行って、「昭和村民具展示」を見学しました。等身大につくられた馬がおかれ、まるで生きているかのような存在感を放ち、だからこそ、その部屋におかれている民具が実際に使われていたことが想像できます。そして、わからつくられるものの豊かさに圧倒されました。

見学後はちょうどよい時間になり、オープンディスカッションがはじまりました。今回の講師は NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台副理事長の佐藤正実さん、昭和村からむし工芸博物館学芸員の松尾悠亮さん、福島県立博物館学芸員でありライフミュージアムネットワーク事務局の山口拡さんの3名です。

山口さんは民具がご専門の方。民具の整理と活用について話をされました。民具の価値判断、收藏にあたっての問題など。民具は集めているだけでなく、整理されてこそ博物館におかれる資料になるそうです。とはいえ、収集も無限にできるわけではないので、收藏スペースをどう使うかは難題のご様子でした。

また収集したものの活用として、企画展などで多くの人にみてもらうことも大事だということ。民具をネタにみんなでコミュニケーションを促進していき、人の語りを記録し地域の歴史が見えてくる、そういう面白いことをしていければという話は聞いていてワクワクしました。

松尾さんは、民具活用法についてのヒントを2つあげてくださいました。1つは布づくり実演です。毎年5月から11月にからむし工芸博物館ロビーで開催されており（今年は新型コロナウイルス感染防止のため中止）、からむし織研修生、通称織姫さんや、地機講習会のベテラン受講生が、一連の作業を実演されているそうです。実演を見学するだけではなく、梅漬けなど、昭和村の文化を教えてもらえる場だと松尾さんが熱く語られました。

私は今年2月に開催された昭和村からむし織の里雪まつりに参加（厳密には雪まつりは当日開催直前に強風で中止になったのですが）した折に実演をみることができたので、その時の楽しさが蘇ってきました。雪まつりは突然中止になった為、実演担当の方々はずでに來られて準備されていたのと、ツアーで來られた方は引き返せなかったこともあり、ある程度の人が集まっていたので、実演はそのまま行われることになったのでした。裂いた繊維を指で撚りをかけながらつないでいく芋績み（おうみ）や、オツムギワク（糸車）を使って撚りを

かけて糸を完成させる撚りかけは、見飽きることがないほどおもしろく、世間話などしながら手を動かすその手仕事にほれほれしました。

民具活用法の2つめは村民を対象にした地機講習会です。毎年11月から翌年3月まで開催され、翌年6月の「からむし市」で販売、翌年11月の「村民文化祭」で展示されているそうです。この講習会でもお茶の時間が「学習の場」としてだけでなく、「人々をつなぐ場」になっているというお話でした。地元の文化を継承するための講習会、なんだか懂れます。

佐藤さんはNPO法人20世紀アーカイブ仙台での活動などについて話をしてくださいました。

アーカイブとは「公文書」「保存記録」「記録保管所」があり、写真で記録したのも民具同様、いつどこで撮ったのかわからないと死蔵写真となってしまいます。いつどこで撮ったものなのか、不明な写真はそこを逆手にとって「どこコレ？」とイベントにして、撮られた場所に心あたりのある人が付箋に書いて写真に貼るということもされたそうです。

アーカイブは経験の同期、未来へのプレゼン、他地域、多世代間の交流にもなっていく話もおもしろく、事実の記録は写真だけでなく、記憶も含め、正史だけでなく俗史も含めていくと、生活感のあるイメージが共有、伝達されていく、それは本当にそうだろうと思いました。

オープンディスカッションでは、前回の講師をされた昭和村で民具整理をされている押部さんの話を聞くこともできました。押部さんは今回のテーマにも深く関わりのある方で、自らも聞き取り調査をされています。昭和村地域おこし協力隊として昭和村に滞在し、任期も来年3月までと残り少なくなってきたのをふまえ、民具の制作方法は実際につくっている人に聞くのが大事だけれど、みな高齢になってきている、確かな情報が得られるのはあと10年くらいではないかとみておられ、この期間に聞き取り調査をしっかり継続してほしいという希望を述べられました。

展示してあった民具がどうつくられてきたか、どのように使われてきたかを知ることは未来へのバトンのようにも思えました。わが家は農家ではありませんが、周りに田んぼが多いので、わらは身近に見られます。そのわらでこれだけの民具がつくられてきたのかという驚きは冒頭にも書いたのですが、とにかく強い印象が残りました。折しも県立博物館の民具室のポイント展でもわら細工が展示されていたので見てきました。本当にわら細工は美しい実用品です。

回を重ねる毎に自分の引き出しが増えてきて、周りにあるものを見る目が変わり、得られる情報の質も変わってきています。民具がコミュニケーションツールにもなるということは自分にとって新しいことでした。

名残惜しいこのオープンディスカッションも残すところあと1回。来月はどんなお話がきけるのでしょうか。金山に行く日が楽しみです。